

論文の内容の要旨

論文題目 日中路地空間の比較研究
—東京の路地と揚子江南部地域の里弄を例に

氏 名 李晋琦

日本の東京の路地であれ、中国の江蘇南部地域の里弄であれ、そこにいとその空間の独特の雰囲気惹かれ、懐かしく感じることもある。本研究は、ともに細い道であり、住まいが多く、しばしば独特の懐かしさが感じられるなど共通点を持つ、日本の東京の路地と中国の揚子江南部地域の里弄を対象とし、国際的な視点から比較する研究である。

都市開発の進捗が都市景観にかつてない影響を与える今日、都市の従来の雰囲気や地域らしさをどう保持し、人々がふるさと感じさせる都市の原風景をどう守り、どう発展していくかを考えるべきである。人々の記憶だけではなく、都市の記憶としての都市空間計画とその経緯が、社会生活を反映した都市の物理的環境、すなわち、各々の都市の特徴を形作っている。路地/里弄空間は都市空間の一つの形として、都市の特徴を物語原風景である。

中国人の筆者は来日時、なぜか東京の路地を歩いた時に、中国の揚子江南部地域にいた時と同様な懐かしさを感じた。中国の揚子江南部地域に生まれ育った筆者が、なぜ見たことがなく、体験したこともなかった遠い日本の東京の路地を身近に感じたか、この空間をはっきり日本のものであると認識しつつも、なぜ昔体験したことのあるような懐かしさを感じたのか。どこが自分のなかの原風景である里弄と重なる。見た目が違って

も、似ている感覚の仕組みは何であるか。さらには、路地/里弄で感じられる懐かしさを他の場所で再現できるか。これらの間に答えることは都市の原風景の保存・創造に寄与できるのではないかと考える。

第一章では、路地/里弄に関する既往研究をまとめ、先行研究における定義を参照しつつ、路地/里弄のことばの異同を明らかにし、本論で扱う路地/里弄の範囲を定めた。路地と里弄それぞれの既往研究は数多くある。路地に関して、1980年代から90年代に数多くの研究がなされ、歴史的な形成経緯や実地調査、住民の意識調査などの研究が行われてきた。これらにより、各地の路地の変遷経緯やあふれ出しなどが調査され、路地の物理的・形成過程、使われ方や社会心理的効果などが把握されてきた。一方、中国では都市建設が進んでおり、里弄の取り壊しや都市再開発が日々行われるなか、里弄を研究対象として取り上げ、里弄の歴史的価値を再認識する研究が見られる。本研究では、これらを重要と思われる先行研究を以下の5つにまとめた。①路地/里弄の物理的特徴、②路地/里弄の心理的評価、③路地/里弄の現状調査、④リノベーション・再開発、⑤アジアにおける路地的な道。

文献を概観した結果、路地と里弄を比較対象として捉え、国際的な視点から研究した例は少ないことがわかった。日本の路地で行われてきた膨大な実地調査に対し、中国側では、里弄の実地調査はまだ少ない。そして、路地と里弄それぞれの雰囲気や人々の愛着に関する言説は数多くある一方で、生まれ育つ環境や文化が異なる人々の路地及び里弄に対する印象評価についての研究はみられなかった。

そこで、本研究では、仮説として、①日中の路地/里弄空間の物理的構成に異同があること、②日中の人々はそれらをそれぞれ日本の路地、または中国の里弄として区別できるが、③路地/里弄を同類のものとして認識することがあること。さらに、④東アジア（日本・中国）において、たとえ生まれ育つ国や受けてきた教育など個人背景が違っていても、共通的な印象（懐かしさ、雰囲気の良い）を持ちうること。⑤人々の印象と路地/里弄の保存意識が関係すること。本研究では、上記5つの仮説について検証を行うこととした。

第二章では、第一章で紹介された日中それぞれの対象地域において、実地調査を行い、各々の道のデータをもとに分類し、その道の景観の物理的特徴を分析、比較した。調査する道の選定及び調査時期等を計画した。日本の東京、中国の揚子江南部地域で行われてきた実地調査の先行研究にもとづき、調査する道の選定及び調査時期等を計画した。そして、日本の東京の路地に近い道を含む地区10箇所と中国の揚子江南部地域の里弄に近い道を含む地区8箇所においてフィールド調査を実施した。

フィールド調査にあたって、目視調査では、道の基本データを記録し、具体的な図面

をもって路地の両側の建物の現状，路地の空間構成やあふれ出しなど私的領域の拡張要素を記録した．そのほか，写真調査を行い，日中で合計 9870 枚の写真データを集めた．

実地調査で得られたデータから，日中それぞれ 130 枚の写真ピックアップし，a. 路地/里弄と思われるもの，b. 路地/里弄らしい部分はあるが，違う要素があるもの，c. 路地/里弄として商業開発また観光地再開発したもの，d. 路地/里弄的ではあるが，生活感がないものと，e. 老朽化して状態のよくないものの 5 つの類別に分類した．

そのうえで，写真に映った道の景観的物理要素を空，道，建物，あふれ出し，人工の緑，自然の緑の 6 つに分け，ピクセル法を用いて，物理要素の可視率の計算を行った．

各分類の可視率の割合の概要から各分類の特徴を考察し，各分類における各物理要素の可視率の比較を行った．その結果，物理要素の可視率から，路地そのものとそれに近似する道はそれぞれカテゴリーとして成り立っていて，商業・観光地の路地的な道，生活感のない路地的な道，状態のよくない道の類別と違い，日中の中に物理的構成に差が見られることがわかった．すなわち，日本の路地と中国の里弄は景観における物理的要素の割合に違いがあった．また，路地や里弄は分類 c, d, e の道と比較して，全体的に緑やあふれ出しが多いこともわかった．

第三章では，日中両国のアンケート調査をもとに，路地/里弄に対する識別及印象評価を考察した．路地/里弄の 5 つのカテゴリーごとに日中それぞれ 2 枚の写真を選定し，アンケートを実施した．アンケートでは，①写真の国の識別を問う，「日本/中国らしさ」，路地/里弄と捉えられるかを問う「路地/里弄らしさ」，②印象評価を得るための，「懐かしさ」，「雰囲気の良い」を質問し，③さらに，「残したいかどうか」の評価で，路地/里弄の価値について聞いた．日本人と中国人それぞれに 7 段階評価を求め，評価の平均値にもとづき，国の識別及び印象評価について分析した．これに加え，印象評価によるクラスター分析及び雰囲気の良いと保存意識の相関分析も行われた．

アンケート調査では，日中ともに東京の道及び揚子江南部の道をそれぞれ日本のもの，または中国のものとして他からはっきり弁別できた．そのうえで，他国のものを日本人は路地，中国人は里弄と識別することがあり，日本人，中国人ともに路地/里弄の識別において，明確な差は見られなかった．

「懐かしさ」においては，日中の分布が分かれることが多く，日本人は路地と思う日中の道の懐かしさに差があり，中国人の場合は里弄と思うは日中の道に差がなかった．一方で，路地/里弄と識別したものの「雰囲気の良い」において，日中は似ている分布を呈していた．また「雰囲気の良い」は「残したいか」と強い正の相関が見られた．

上記から，日本の路地と中国の里弄に物理的構成に違いがあるにもかかわらず，同じものとして認識されることがわかった．さらに，類別ごとに対する印象評価の解明により，東アジア（日本・中国）の異なる生活環境で生き，違う文化的背景を持つ人々が路地/里弄をはっきり識別することができ，少なくとも，中国の人は里弄と思う日本の道

(路地) に対し、懐かしい印象を有することを検証でき、路地空間における文化・社会制度・伝統を超える共通的な認識が存在すると検証できた。

以上をまとめて、本論では、先行研究で扱っていなかった日中の路地/里弄空間を国際的比較の視点から捉え、路地/里弄そのもの物理的特徴を明確し、路地/里弄的な道と他の道の異同を明らかにした。さらに、路地が属す国及び路地の識別、路地に対する共通的な印象はあるかを検証し、見た目が違う場所が似ている雰囲気醸し出すことが可能であり、その原因は物理的要素のほか、物理要素だけでは説明しきれない人々のイメージにも関係あることを論証した。

日中ともに現在、路地/里弄空間が喪失されつつあるなか、本論は路地/里弄空間はどのようなものか、日本の路地と中国の里弄の異同点は何かにめぐって、フィールド調査とアンケート調査を通して、検証を行った。都市空間（路地/里弄）における調査・分析方法の提示と人々の空間（路地/里弄）に対する印象評価を明確した。

本研究は基礎研究とし、アジア伝統的な町空間の比較研究を通して、日中お互いに勉強できる点や改良すべき点の提示、中国は日本の発展経緯から経験と教訓の参照、そして、路地空間の国際比較研究における研究方法に寄与できれば幸いである。